



仲間とともに、よりよく生きる

道徳の 時間

I はじめに

スマートフォンに代表される情報技術の目覚ましい進歩と普及により、私たちが日常生活で得る情報の量と速度が増大していることに伴い、人々の考えや価値観の多様化も益々進んでいる。心も体も大きく成長する中学校段階において、生徒たちが大いに悩みながら、自らの生き方を考えること、他者と協働しながら、よりよい方向をともに模索して問題を解決していくことが、今後の人生には必要不可欠な学びであろう。

「特別の教科 道徳」の学習指導要領では、「ふだんの生活においては分かっていると信じて疑わない様々な道徳的価値について、学校や家庭、地域社会における様々な体験、道徳科における教材との出会いやそれに基づく他者との対話などを手がかりとして自己との関わりを問い直すことで道徳的価値の理解が始まる」¹という記述があるように、道徳の時間においても、他者との関わりを大切にしたい学び合いが必要である。自他の考えや価値観に影響を与える相互作用のある学びの過程とともに、よりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢を大切にしながら、道徳の時間における「自己を拓き、協創する生徒」の姿を具体化していく。

II 道徳の時間の研究内容

1 道徳の時間における「自律」と「共栄」に向かう学び

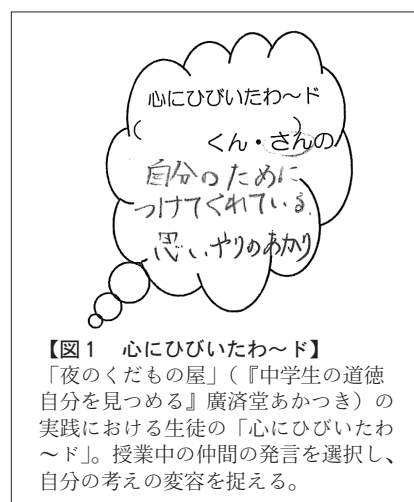
本校の道徳の時間の実践においては、教材や内容項目を自分事として捉えることや、自分の意見に固執せず、柔軟に自分の考えを変化させるような授業展開を大切にしてきた。また、「特別の教科 道徳」に向けて、発達段階に応じて、道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題として捉え、多面的多角的な視点をもって向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換が求められている。そのためには、自分の考えをもとに表現する機会の充実を図り、生徒と生徒及び自分自身との対話が深まるようにするとともに、個と集団それぞれの高まりを目指した「自律」と「共栄」に向かう学びを実現させる必要がある。

道徳の時間における「自律」と「共栄」に向かう学びとは、題材を通して道徳的価値と向き合い、仲間と関わりながら、感受性や感性を含めた様々な考え、もしくはその考えの表れである言葉から自分の考えを選択し、互いの考えを交流し、補い合うことで、多面的多角的に道徳的価値を深めることであると考える。例えば、ある道徳的価値を理解しようと、生徒が他者や対象に働きかけることで、他者とのつながりを意識し、自己の変容を生徒自身が認識しやすくする。また、互いの考えを表出し合い、交流から互いの変容を明確にし、比較することで自己の考えを練り直し、互いに考えを深めるような展開が考えられる。本校では、道徳の時間において「自律」と「共栄」に向かう学びを展開することで資料・教材等と真摯に向き合い、仲間と活発に議論することを通して、仲間とともによりよく生きるための豊かな人間性を育むことを目指す。

2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

(1) 他者の意見・考え等による自己の変容の自覚化

中学生という発達段階においては、ある物事について偏った思い込みがあったり、一つの側面からしか捉えられなかったりすることがある。このような状況の中で、授業で仲間の考えに触れることを通して、自分の見方や考えが広がったり、深まったりすることが、道徳の授業には大切であるといえる。しかし、そうした自分の見方や考え方の変化や成長に気付かない生徒も多い。特に、入学後間もない1年生は、他者の考えから影響を受け変容している様子がありながらも、自己の変容を自覚し、表面化するという点で課題がある。そこで、1時間の授業



の中で、発せられた多くの言葉の中から自分の考えに影響を与えた仲間の言葉や考えを選択し、カードやワークシートに記す。例えば、【図1】に示す「心にひびいたわ〜ド」は、授業の終末における振り返りの際、自分の考えを深めることにつながった発言を記述し、自己の変容に影響を与えた他者との関わりの自覚化を図る。このように「自律」に向かう視点をもった展開をねらうことで、生徒は自分の見方や考え方が広がりや深まりを自覚し、自己の成長を実感しながら道徳的実践意欲や次回の授業に対する期待を高めることができると考える。また、自己の変容に他者が関わったことを自覚するような取り組みを長期的に行っていくことで、他者との関わりが自己の成長に不可欠であることを認識し、自ら他者との深い関わりを求めていくようになると思う。同時に自分の考えや発信も他者に影響を与えていることに気付き、互いの成長を目指すようになり、「共栄」に向かう視点につながると考える。

(2) 自己と他者の考え・立場を比較し、道徳的価値を多面的多角的に捉える授業展開

授業の序盤に、自分の考えや立場を明らかにする場を設定し、他者からも分かるように示す。互いの立場を比較しながら考えを共有することで、異なる考えや立場の相手には、「こんな意見もあったのか」と考えたり、似た考えや立場の相手には「この部分が私と同じだ」と共感したりし、考えを強化する。このように、様々な考えや立場を知ったうえで、自分なりに考え、自己の考えを選択することができるような「自律」に向かう視点をもった展開をねらう。その後、仲間から自己の考えについて問われることで、「自分はどのようにしてそのような考えに至ったのか」と自己の考えを見直し、その考えの根拠を明らかにして発信することで、さらに自分の考えを練り直すことになり、考えを深めることになる。また、反対に仲間に対して問う際も、自己の考えと仲間の考えを比較し、「どうしてそのように考えたのだろう」と考えることで、自己の考えに根拠をもつと同時に、仲間の返答から自分にはなかった視点ももらい、道徳的価値に対する深い理解と、多面的多角的な捉え方につながる。それは同時に互いの考えを補い合い、支え合うこととなり、「共栄」の視点をもった授業展開になる。例えば、最初の基本発問等に対し、その時点での自己の考えや立場を明らかにした上で、黒板の決められた場所にネームプレートを貼ることで気持ちや考えを表したりする。その後、中心発問の段階で再度考えや立場を示し、自己の考えの変容を自覚したり、その変容について議論したりする。これにより自己と他者との意見や考え、価値観の相違が可視化され、それらを照らし合わせて、考えをより深めたり、互いの考えを補い合ったりすることで、道徳的価値を深めることにつながる。

Ⅲ 実践例

- 題材：ドナーカード～脳死と臓器移植から命を考える～（第3学年）
- 教材：「ドナーカード」（中学生の道徳3年「自分をのばす」廣済堂あかつきp.36-37）
- 内容項目：D-19 生命の尊さ

1 題材について

第3学年はこれまでに、長崎修学旅行を中心とした平和学習において、世界平和や生命の尊さ、よりよく生きることについて考えてきた。本題材では、自分と家族という視点で命を自分事と捉え、改めて生命の尊さについて見つめ直すことをねらった。

「生命の尊さ」の内容項目では、第1学年の時に脳死と臓器移植について知るとともに、幼児が脳死した場合に、家族はどのようにその命や臓器移植について判断していくかを考えるという題材を扱った。ドナーカードで臓器提供可否の意思を表示することができる15歳という年齢を迎えるにあたり、副読本や仲間との議論から臓器移植について考えることを通して、命の尊さを自覚し、自他の生命を尊重する態度を育むことをねらった。

2 授業の展開

- ①第1学年「15歳以下の臓器提供」について考えたこと・感じたことを想起する。
- ②脳死と臓器移植について説明し、共通理解をする。
- ③「もし自分が脳死状態になったら、自分の臓器を提供するか、提供し（たく）ないか」を問い、黒板にネームプレートを貼る。また、その理由を全体で共有し、意見交換をする。★1
- ④副読本「ドナーカード」を音読し、内容を整理する。二つの投稿は、家族の命を大切に思う気持ちからであることを共有する。
- ⑤「現在の家族が脳死状態にあった時に、家族の臓器を提供するか、提供し（たく）ないかを問い、黒板のネームプレートを移動する。また、その理由を全体で共有し、意見交換をする。★1
- ⑥ドナーカード本体を配付し、どのようなものかを説明する。
- ⑦【中心発問】命に対して、どのように向き合えばよいのだろうか。
自分の考えをワークシートに記入し、全体で共有する。★2
- ⑧授業を終えて「こころのあと」に考えたことや感じたことを記入する。

3 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

●手立て1（★1部分）

自己と他者の考え・立場を比較し、道徳的価値を多面的多角的に捉える授業展開

「自律」と「共栄」に向かう学びを実現するために、それぞれの発問に対して自分の考えを明確にもち周囲に示すこととともに、自ら関わりを求め、共に活かし合えるような手掛かりをつくることが大切であると考えた。【図2】のように授業の展開③⑤の質問についての判断をネームプレートで表示し、その考えの変化が分かるように板書を工夫することで、生徒同士が「なぜその考えに至ったのか」と議論が行えるようにした。



【図2 ネームプレートでの意思表示】

ネームプレートと矢印を用いて、自分と仲間の立場と、考えの変化を明確にした。その後、互いの考えについて議論を深め、互いの考えを補い合う。

●手立て2（★2部分）

他者の意見・考え等による自己の変容の自覚化

中心発問における考えを個人がまとめるにあたり、本時の学びの過程を捉えることが重要であると考えた。そのため、【図3】のようにワークシートに自分の考えとともに、「この考えに至った（参考になった）仲間の考えや発表」を記入する欄を設けた。仲間の意見が自分の考えにどのように活かされたかを認識する手立てであるとともに、それを発表し共有することで、「自律」に向かうばかりではなく、さらなる集団の成長へ向かう手立てにもなりうると考えた。

4 実践を終えて

手立て1について授業の展開③⑤において、黒板に意思表示をする時に「僕はこう思う、あなたは？」という会話が起り、それぞれの考えの変化を黒板に表示することだけでも、「どうして？」と、生徒の反応を引き出すことができた。また、教師も黒板を見ながら「どの人に意見を聞いてみたい？」と発問することで、生徒同士の意見交換を促すことができた。さらに、なぜ変化したかを意見交換することで、議論の内容項目の価値に向かう効果があった。

手立て2について、ワークシートの工夫により、

■ 私たちは命とどのように向き合えばいいのだろうか

この話を讀むまで自分の命は自分のものかと思っていたが、自分の命は周りにいる大切な人の命（もしかたでは言えないが）肉である）でもあるのだと感じた。だからもっと自分を大切にすることを、人だけでなく動物、食べ物にも感謝し、大切にしたいと感じた。自分は周りに支えられて生きていることを改めて意識したい。

この考えに至った（参考になった）仲間の考えや発表があればこう

Aくん 死んで臓器は生きた証だから、その人のために、簡単にあげられない。

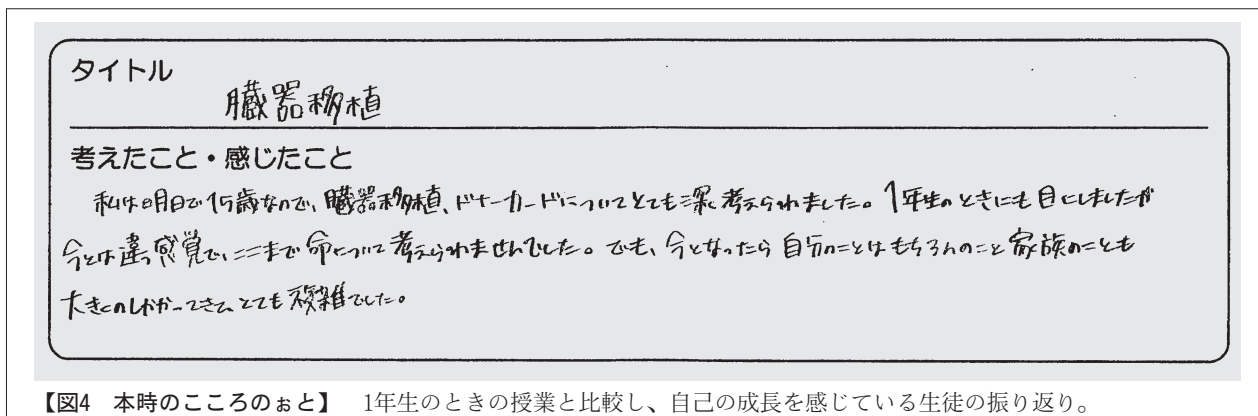
Bくん なるべく「死にたい」とか言っていない。もっと命に対して重く受けとめるべき。

【図3 本時のワークシート】

自己の変容と他者との関わりを自覚することができるように工夫したワークシート。仲間の意見と照らし合わせることで、自己の考えの変容や深まりに気付くことができた。

この授業を通して、誰の意見が心に残り、その結果自分はどのように考えが変容したか、深まったかを明確にすることができた。また、授業の展開③⑤の議論では発信しなかった生徒も、仲間の意見を聞いて新たに考えたことを記述し、自分の意見として仲間に伝えることができていた。

授業が進むにつれて、「自分の命と家族の命の重みが、自分の中で違うのでは」という揺れを生むことになり、自分のものだけではないかけがえのない命の有り難さについて、考え深めることができた。授業の終末で記述した「こころのおと」には、議論が深まってから2年ぶりにドナーカードを手にしたことで、【図4】のように第1学年の実践で手にしたときとの重みの違いを感じている生徒が多かった。



IV 実践から見えてきたこと

○成果

- 主体的に授業に参加し、一つの道徳的価値に対して仲間の意見を取り入れながら多面的多角的に捉えたり、自分の考えを深めたりし、それを自分の言葉で成長として振り返ることができた。
- 他者との関わりを意識した取り組みを行うことで、他者の意見や考えを得たことによる自分の成長を自覚する生徒が増えた。さらに、そのように他者と関わり、自分とは異なる考えに触れることが自己の成長につながることを自覚し、次の学びや道徳性を高めることにつながるような手立てとなった。

●課題

- 1年次の実践では、一つの事例を多面的多角的に捉えることができる題材が多く、モラルジレンマのような複数の価値が対立するような題材においても、これらの手立てが活用できるかを検証する必要がある。
- 手立ての種類が少ないので、さらにいろいろな手立てを工夫し、生徒の道徳性を高めるのに効果的なものを模索していく必要がある。
- 道徳の時間の授業においては、自分事として捉え、選択したり、互いに価値について考えを広げ、深めたりする姿が見られたが、その結果、道徳性を高めるような意欲を育むことにつながったかを、「こころの軌跡シート」などの長期的な周期での振り返りや日常の姿から見取る必要がある。

V 引用・参考文献

<引用文献>

- 1 文部科学省「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」、p.14、2015年

<参考文献>

- ・押谷由夫・諸富祥彦・柳沼良太編『新教科・道徳はこうしたら面白い～道徳科を充実させる具体的提案と授業の実際～』図書文化社、2015年
- ・諸富翔彦『「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業～エンカウンター、モラルスキル、問題解決学習など「理論のある面白い道徳授業」の提案』図書文化社、2015年

